

絵画表現活動により得られる のびのびとした心の解放感について

森下 嘉昭*・福田 隆眞

On the Feeling of Release through Painting Activities in Art Education

MORISHITA Yoshiaki* and FUKUDA Takamasa

(Received August 6, 2009)

キーワード：美術教育、絵画活動、保育者、解放感

はじめに

私たちがよくニュースや新聞で目にする暗い話題の背景には、私たちを取り巻く目に見えない不安を感じさせるものも少なくない。多様な価値観と目まぐるしく変化する情報に囲まれ、目指すべき目標や未来が見えにくく、まるで自分というものが虚ろなものであるかのような不安に包まれているようである。このことは、子どもを取り巻く諸問題についても無関係ではなく、その多くは、社会全体がこの不安のうねりに巻き込まれていることが原因の一端のように思える。

しかしどのような社会の中で生きるにしろ、子どもたち自身がのびのびと自らを表現できるようにしていくことは、心身ともに豊かに生きていくために大切なことである。

平成20年3月に告示された幼稚園教育要領や保育所保育指針において、表現の領域は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と示されている。ここで「自分なりに表現する」ための前提として、子ども一人ひとりが、多様な価値観や加速する情報化社会の中で自ら選択し、判断し、行動し、表現する主体としての自分自身というものを実感することが必要だと考える。自分自身の存在をしっかりと感じることで、他の誰でもない自分の表現の価値を認識し、そのことによって他人の表現の価値を認めることもできる。そして、優しさをもって他者との関係を築くことのできる能力は、創造性といえる。それは、国際化が進み、多様な文化の交流がますます盛んになってくる社会においても必要な能力である。

ところで、のびのびと自分なりに表現するとはどういうことであろうか。私たちの周囲は多くの情報に囲まれ、様々な価値観やルールがあり、それらから影響を受けながら生活をしている。そのことは、他者と関わり合いながら生きていくために必要不可欠なことである。しかし、常に周囲の情報や価値観に振り回され、そればかりを意識している状態は、のびのびと自分なりに表現できているとは言えない。気づかぬ間に本来の自分の心が抑圧

*山口芸術短期大学保育学科

され、不満を抱えてしまっている。のびのび自分なりに表現するとは、この抑圧されているという不満を取り除き、心を解放し、どのような選択にせよ自ら主体的に生きているという実感を持つことである。筆者自身が絵画制作を続けてきた中で、絵画表現活動には、抑圧された心を解放し、日ごろ意識していないのびのびとした自分を発見させてくれる可能性があるのではないかという思いを持つようになった。

本稿では、生きる主体となるべき自己の存在の確認をテーマとして、これまで筆者が試みてきた絵画表現活動をまとめ、その制作過程で感じた、のびのびとした心の解放感について考察する。また、それらを生かした教材化を試みる。

1. のびのびとした心の解放感の必要性

表現をするということは、心の内側にあるものを外側に表すことである。心と表現は、密接に結びついている。ここでは、表現においてのびのびとした心の解放感がなぜ必要なのか、また、心をどのように捉えるかについて述べておきたい。

私たちは、さまざまな教育や環境の影響を受けることによって、社会の中で自分を表現する上で必要な知識や技能を身につけていく。そのこと自体は、社会生活を営んでいく上で必要なことである。自分の心をうまくコントロールしなければ、他者との関わりを円滑に進めていくことも困難になるであろう。しかし場合によっては、これは人間が本来持っている心の部分を、意識によって抑制しているとも言える。この抑制の割合が大きく強くなりすぎてしまうと、徐々に不満や不安が膨らんでいってしまいかねない。そのように心を抑制している意識を逆に抑制し、のびのびと表現している実感を得ることができれば、それは、自分なりの表現にもつながっていくであろう。外部から抑制されて「させられている」という思いを募らせるよりも、自ら主体的に「している」という思いをもって表現していくことが「自分なりの表現」としては自然であろう。

心という言葉は、非常に多義的で分かりづらいものであるが、この心を、「意識」と「無意識」に分ける考え方がある。¹⁾「意識」とは「認識し、思考する心の働き」のことで、心の中でも自分が普段から認識できている領域である。それに対して「無意識」とは、「本人は意識していないが日常の精神に影響を与えている心の深層」のことで、普段自分では意識していない心の領域ということになる。抑制しているのが意識であるなら、のびのびとした解放感を感じるためには、普段意識することのない無意識の部分を感じるであろう。

また「人間が美しいものに感動したり表現したりする行為は、心のなかの無意識と意識の両方の層にわたって関係しているのだ。魂がゆさぶられるとき、それは心の無意識の層とつながっている。」²⁾ともいわれるように、やはり人間は意識的な部分のみで成り立っているわけではない。総合的な人間形成を考えたとき、無意識の部分を無視して考えることはできない。のびのびとした自分なりの表現を考えるにあたり、普段は意識していない無意識との関わりは重要なことである。

とはいえ、意識の抑制を取り除き、いたずらに無意識の部分を暴走させることは、のびのびとした自分なりの表現とは異なるように思える。ここで目指すのびのびとした解放感とは、意識を抑制することで、意識的に無意識の層を感じることである。

2. 絵画表現活動と心の解放感

前項では、のびのびとした心の解放感の必要性について筆者の考えを述べた。では、絵画表現活動とのびのびとした心の解放感とはどのように関係するかを述べる。

一般的に、絵を描くとはどのようなことと考えられているだろうか。「あの人は絵が上手だ」「私には絵心がない」という言葉を耳にする。こういった言葉の背景として、出来上がった作品をイメージしていることが考えられる。そしておそらく、技術的な完成度に関わって判断していると思われる。キャンバスや画用紙といった支持体に考え抜かれた構図、すみずみまで手が加えられ見栄えよく仕上げられたもの。あるいは本物らしく写実的に描かれたもの。それは絵画のひとつの判断基準であるかもしれない。しかし、こういった作品は、描くために相当の訓練を必要とする上、自分の外部の価値観と照らし合わせながら、いわば、終始意識的にコントロールされ制作されていくものである。非常に抑制の効いたものであるといえるであろう。それに対して、例えば電話をしながらつつい手元のメモ用紙に、とりとめもなく落書きを描いてしまうことなどを思い浮かべてみると、気負いのない伸びやかな気持ちで描いていたりする。これは、描くときに絵の完成に対する意識を持っていない。絵を描きながら、作品を完成させるというよりはむしろ描くこと自体に重点が置かれているように思える。つまり、制作過程自体が目的なのである。このことから、のびのびとした心の解放感を考えた場合、完成した作品よりも、大切なのはむしろその制作過程にある。

そう考えると、絵画作品の完成度といった問題は、心の解放を目指す造形活動としての絵画表現という側面から言えば、必ずしも必要な要素とはいえないと考えられる。

19世紀のフランスの詩人シャルル・ボードレールは、同じく19世紀の風景画家コロアの作品が「不器用」だという評価を受けていることに触れ、次のように述べている。「出来た作品と仕上げられた作品との間には大きな違いがある」「一般に出来たものは仕上げられたものではないこと、また一個の非常に仕上げられた作品がまったく出来ていないこともありうること」。³⁾ここで「仕上げられた作品」とは、技術的、物質的に完成度の高い作品のことである。一方「出来た作品」とは、そういった完成度を基準とするのではない。表現したい内容を求めて素材と関わった結果、それが画面に表れたときにはこういう作品が「出来た」ということである。このことは、器用に仕上げられた完成作品自体の評価とは別の要素が、絵画を考える基準として重要だということを示している。つまり作品という結果よりも、その過程に重要な意味があるということである。

幼児教育や保育の現場において、保育者が子どもに対し「仕上げられた作品」を求めてしまうことは往々にしてある。それは私たち大人の意識の中に「仕上げられた作品」のイメージがあり、そのように仕上げなければならないという先入観が知らず知らずのうちに刷り込まれているからである。そして、大人がイメージする作品を完成させるための技術を習得させなければならないという思いから、その描き方を教え、つついその通りに描かせている。もちろん、絵を描くときに技術の習得がまったく必要ないということは極端であろう。用具や素材の基本的な扱いについての知識や技術は必要であるし、制作に向かう態度について、しっかり身につけさせなければならないこともある。しかし、技術の習得のみに終始した絵画表現は、うまく技術を習得できなかった場合には大きなストレスを残す。上手に出来なかった子どもは、自分は上手に描けないという思いが残り、徐々に描

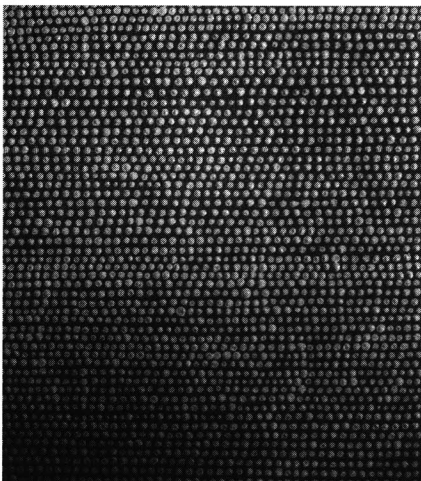
くことに苦手意識を持っていくと考えられる。そうなれば子どもが絵を描くことで心を解放し、のびのびと「自分なりに表現して楽しむ」ことはできなくなってしまうおそれがある。

3. 点描による心の解放感獲得の試み

ここでは、今までのことを踏まえて筆者が試みてきた点描による絵画表現について記していく。

筆者自身、ある時期の自分の作品制作について、大きな不満を感じていた。自分が好きで描いているはずなのに、どうも自分ではない何かに描かされているような不満である。自分をもっと違うように描きたいと思っているはずなのに、それは駄目だと抑制する意識が自分の中で働いているのである。その抑制された感覚からの解放を求めて、それまでの具体的な対象を描く制作方法をやめ、点描を試みることにした。

点描といって思い浮かべる作品の代表的なものとして、新印象主義の画家ジョルジュ・スーラの《グランド・ジャット島の日曜日の午後》(1884-1886)がある。この作品は、印象主義の筆触分割の技法を科学的にとらえ、風景など具体的な対象を描くために「点描画法」を用いている。しかし、筆者が点描を用いた理由は別にある。点描で絵画表現をするということは、絵の要素として最も単純な単位である点を、半ば自動的に繰り返し打っていくということである。その最も単純なルーチンワークが、絵画表現の際の意識的な活動からの解放を誘い、のびのびとした解放感を得られるのではないかと考えたのである。そのような点描の、行為としての側面を際立たせるために、私は、まず画面から具象的イメージを取り除いた。絵の中に具象的なイメージを取り入れると、どうしても上手か下手かという意識が働く。何を描くか、画面の中の構図のバランスはどうか、質感はどうか、量感はどうか。そういった作品の完成度にかかわる意識的な操作を極力排除するため、具象的なイメージを点で描くのではなく、画面をただひたすら点で埋め尽くすという方法(図1)を試みたのである。



(図1)

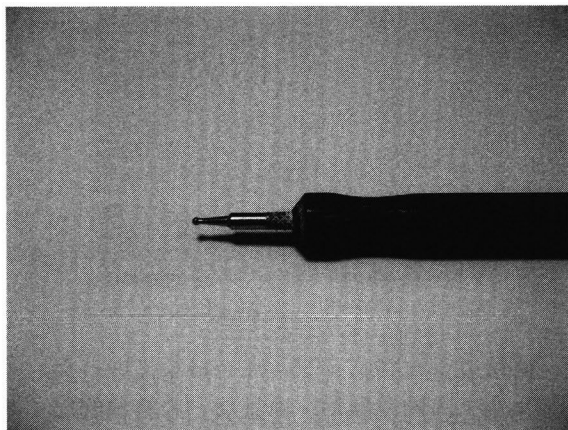
このように絵の完成に向かう意識的な要素を取り除くような活動は、シュルレアリスムのオートマティスムを思わせる。シュルレアリスムは、「理性の支配作用をまったく受け

ない思考、そしてあらゆる美的、道徳的先入主の外にある思考。」⁴⁾である。もともとは文学運動として始まったが、その後絵画においてもオートマティズムの考え方がさまざまに応用されていった。オートマティズムは自動記述と訳され、「従来の意識的な先入観、価値観、表現技術の意識等にとらわれず、無意識な状態と契機によって、創作を行うこと。」⁵⁾である。また、描く行為自体を重視したような表現活動として、アメリカ抽象表現主義のアクションペインティングが挙げられる。アクションペインティングとは、1952年に抽象表現主義の画家ジャクソン・ポロックの作品について初めて用いられた呼称である。アクションペインティングは、「カンヴァスが実際の、あるいは想像上の対象を再生し再現実分析し、あるいは『表現する』空間であるよりも、むしろ行為する場としての闘技場に見え始めた」⁶⁾とあるように、意識的表現の結果よりも、むしろ行為そのものに重点が置かれている

これらの活動も、絵画を仕上げようという意識の抑制を離れて、偶然などの要素を利用しながら、表現行為そのものの中で先入観などの意識の抑制からの心の解放を求めたということもあるのではないか。

3-1 ドットペンシルを用いた点描による試み

点描で制作するに当たり、ドットペンシル(図2)という用具を使い点を打っていった。ドットペンシルとは、先端が金属の球体でできたペン状の用具である。球体の部分にインクや塗料をつけ点を打っていく。鉛筆と同じように持ち、小さく丸い点を打つことが可能である。



(図2)

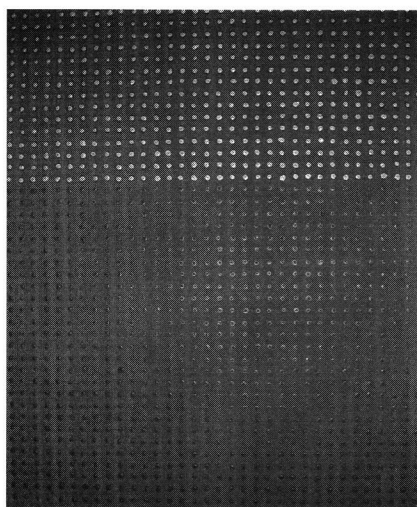
支持体には、板パネルやキャンバスを用いた。ドットペンシルで点を打つので、画用紙などの紙では、制作中に破れてしまう恐れがある。ある程度の抵抗感がなければならぬと考えた。

塗料はカラージェツソを使用した。ジェツソは元々油絵やアクリル画の地塗り剤として用いられる塗料であるが、絵の具のように色材としても利用できる。水性で乾燥が非常に早い。乾くと耐水性になる。原液の状態では、点を打つのに適度な粘りがあり扱いやすい。などの特徴が挙げられる。

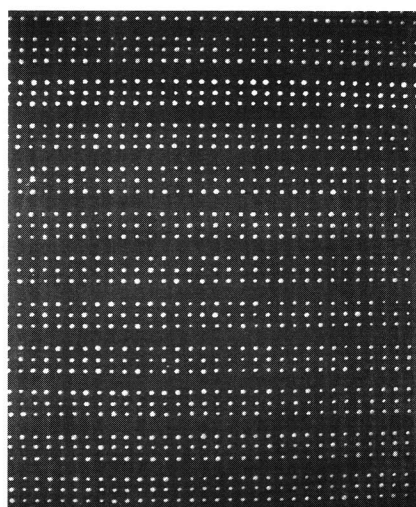
以下に、ドットペンシルを用いた点描の試みと、表現活動中の心の解放感についてまとめてみる。

①規則的に点を打つことができるように、あらかじめ等間隔で点の下描きをしてから着色する方法。(図3)(図4)

この方法では、まず地塗りをしたキャンバスに鉛筆と定規を使い等間隔に点の下描きをした。ランダムに点を描きこむと、画面上の点の密度のバランスに意識を強く向けてしまうと考えたからである。次にドットペンシルを用いて、その下描きを基にカラージェツで点を打っていった。木枠に麻の画布を張ったキャンバスは、筆で描く場合には適度な弾力と抵抗感があり都合がよいが、鉛筆やドットペンシルなど硬い用具を用いた場合は、点を打つときの力加減によって画布が弛んでしまい、力の入れ具合に大きな意識を向けることとなった。さらに、あらかじめ下描きがあり、それを辿るように上から色で点をつけるという手順は、たとえ具象的なイメージがなくても、常に下描きの位置を気にして点を打たなければならないという意識が強かった。その制作過程に心の解放を実感することはなく、まさに「下描きのとおり描く技術に終始した絵画表現」といえるものであったかもしれない。



(図3)



(図4)

②下描きをせず、一行ずつフリーハンドで、直接カラージェツで点を打っていった。その上から記号的に点を重ね、内容を付け加えた。人物や静物、風景などの具象的なイメージを用いずに、心の解放を目指しながら作品に内容を込めようとする試みであった。(図5)(図6)

この方法では、地塗りをした板パネルに、下描きをせずにフリーハンドで点を打ち込んでいった。板パネルは描く際の抵抗感が非常に強く、ドットペンシルを使用しても、力の入れ具合に気をとられることはなかった。一行ずつ描いていくという方法は、日頃自分に染み付いている文字を書くときの感覚をそのまま利用し、点を打つ位置を特に意識することなく、点を打つ行為そのものに没頭していくことができるのではないかと考えたためである。下描きをしてから描いた作品に比べて、ごく自然に点を打つ行為に集中していくことができた。点で全体を埋め尽くした段階で、画面上は、フリーハンドゆえの点の大きさ

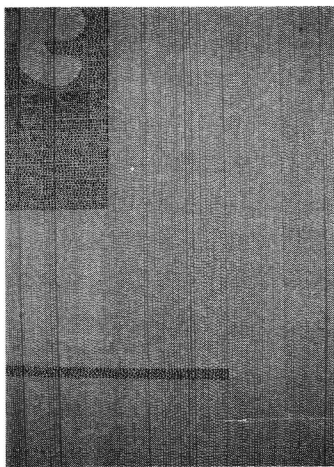
の微妙な乱れや行のズレによって、空間を形作っていることに気づく。それは透視図法に見られるような、現実空間を再現する計算された空間表現とはまったく違う、不思議な柔らかい空間である。

制作を始めて初期段階では、「今どのくらい点を打ったか」「残りどのくらい点を打つか」といった意識が働いていたが、しばらくすると徐々に点を打つ行為に集中していった。単純な行為ゆえに、しばらく続けていると半ば自動的に点を打っているような感覚になり、所々でふと気がつけば、自分がかなりの点を打っていることに気づく。後で振り返ってみると、繰り返し点を打っていく中で、とりとめもなくいろんなことを考えていたような感じもあるが、はっきりと覚えてはいない。気がついた時にはその行為に没頭し非常に平穏な心の状態を感じていた。絵を上手に仕上げようという意識はまったく無く、点を打つ瞬間瞬間の蓄積が画面を作り上げた。これは一見、点を打つことに固執し囚われているようにも思えるが、制作している本人としては、点を打つこと以外にあまり意識を向けていなかったゆえに、意識の部分が抑制された状態になり、のびのびとした解放感を感じていたと考えられる。その感覚は快樂とも呼べるかもしれない。

この作品は、画面全体を点で埋め尽くした上から点を重ねて記号を描いたが、記号を描くときには、心の解放感を強く感じることは無かった。心の解放感という意味では、記号がなくても表現として意味があるように感じられた。



(図5)



(図6)

3-2 指を用いた点描による試み

前節では、ドットペンシルという用具を用い、キャンバスや板パネルに点を打っていた活動をまとめた。しかしこの用具は長時間使用していると指が痛くなったり、ドットペンシルの先端に絵の具が固まってきて、その都度ふき取らなくてはならなかったりと不便な面も多かった。そこで用具を用いるより指を使って直接点を打っていく方が、よりスムーズに活動にのめり込んでいくことができるのではないかと考え、次は指にジェッソをつけ、画布に直接点を打つという方法を取った。(図7)

以下に、自分の指を用具とした点描の試みと心の解放感についてまとめる。

この方法では、地塗りをしたキャンバス布を床に広げ、布の上に乗って指で点を打っていた。今までのようにキャンバスやパネルを机の上、あるいはイーゼルに立てて描いていた時とは異なり、部屋いっぱいキャンバス布を敷いた環境での制作という解放感があ

った。

カラージェットを紙皿に出し、人差し指につけながら点を打っていった。点の大きさはドットペンシルの時と比べてかなり大きく、面といえなくもないが、絵の具の付いた指を置くだけで、線を描くようにスライドさせたり、面を塗るように動かしたりはしていないので、その行為としては点を打つ行為としたい。

これを、ドットペンシルの時と同じように繰り返し点を並べて描いていった。ドットペンシルも指も、点の形としては円形か楕円形で大きな違いはない。指の場合は、絵の具が徐々にかすれていくのがドットペンシルよりも分かりやすいという違いはあったが、指につけてから絵の具がかすれていくまでのリズムがほぼ一定で、開始直後から意識的な思考はあまり無く、ドットペンシルで点を打っていた時よりも心地よく点を打つ行為に集中している感じがかった。人差し指第一関節の楕円形が、一定のリズムでかすれ、絵の具をつけてはまたかすれ、という繰り返しの中で、徐々にそのリズムの中に自分が埋没していくような心地よさがあり、気がつけばかなりの点を打っていた。というような感じがかった。この、単純な行為の繰り返しにより得た感覚は、どのようなものであろうか。

人間は、「感覚遮断タンク」(人間の身体と同じ比重の水で満たされ、音や光の刺激を最小限に制限したタンク)の中に浮かぶことで、自分自身の脳で幻覚を創り出すという⁷⁾。これは、外部からの刺激を遮断することで、日頃コントロールしている意識以外の領域が浮かび上がってきたといえる。それに類するような効果を、うまく活かしていたのが、古代ギリシアの「逍遥学派」のようである。「逍遥学派」は、散歩道を歩きながら哲学論議を交わしたという。見慣れた道を歩いているとき、人間は感覚遮断に近い状態に陥るといえる。これは、何度も歩いている道には、特に意識を向けて見るべきものがないからであり、このようなときに無意識が浮上してくる。その無意識をうまく利用し、日常の意識以外の発想というものふと浮かびあがってくることがある。

画面に指でひたすら点を打つという活動は、この感覚遮断に近い感覚をもたらすのである。活動としては、点を並べているに過ぎず、特に強く意識を向ける事柄もない。そういうことから、日常の意識を抑制し、のびのびと描くということを感じさせてくれる。



(図 7)

おわりに

以上で試みてきた点描による表現を振り返ってみると、絵画表現活動を通してのびのびとした解放感を得るには、一つの単純な行為に集中してのめりこむことで、その他の刺激をある程度遮断することが有効な方法のひとつではないかと考える。そうすることで、意識の働きを最小限に抑え、日頃意識をしていない自分に対しての感覚が働く。日頃の意識の抑制から解放されゆっくりと自分が開いていくようなその感覚が、のびのびという感覚につながるのである。絵画表現活動は、そのような解放感を得ることができる活動なのである。

はじめから絵を描くことが嫌いな子どもは少ない。描くことに特別な抵抗感を持たず、目の前にある素材に親しみ、のびのびと表現したものを見てもらったり褒められることに喜びを感じている。そういったかわりの中で、大人の先入観によって自分の思いを受け入れてもらえなかったり、大人の側に造形表現に対する苦手意識があると、子どもは徐々に描くことから遠ざかっていくであろう。指導する保育者自身が苦手意識を持たず、のびのび描くという実感を持つておくことも、大切なことである。

のびのびとした解放感を得る点描を用いた絵画表現活動を教材として考えるときには、対象となる子どもの発達を考慮する必要がある。

ひとつの行為に集中するにしても、ただ点を打つだけではすぐ飽きて、長時間集中して楽しむことが難しいことも考えられる。そういった場合、一つの行為への集中に誘うための何か具体的なきっかけが必要になる。例えば、あらかじめ地面の絵柄がプリントされた画用紙を用意し、点を並べて打つことで「蟻さんの行列」を描いてみよう誘ってみたり、畑の絵柄を準備しておいて「種を植える」ということをきっかけとして点を打つみるのも方法であろう。また、ドットペンシルのような用具も、まだ鉛筆持ちができない子どもには難しいと思われる。そのような場合には、子どもが日常使用しているマーカーなど点の打ちやすい用具を用いても良いだろうし、スタンプングという方法で、握ったりつまんだりするような持ち方でスタンプとなる材料を持ち活動しても良い。よりダイナミックに楽しむならば、部屋いっぱい模造紙を広げておき、手足に絵の具（ポスターカラーなど）を付けてその上を「お散歩」してもよいだろう。

ただ、注意しなくてはならないのは、その行為に集中をすることである。点描による表現は、その行為に集中し解放感を得るまでに、ゆっくりとした時間が必要だという特徴があるようにも思われるので、できるだけゆっくり、点と点を並べるようにしてみるなど、ゆっくり活動できるための工夫が必要であろう。

心を解放しのびのび描くということは、教えられたままを教えられたとおりに描くことができる技術や、見えたものをそっくり描くことができる技術ということとは必ずしも一致しない。しかし、何もかもを取り払って自由に好き勝手に描くということとも別であろう。それは、暴走とも言うべき状態であろう。そこには、主体となるべき自分の発見はなく、混乱が生まれる。大切なのは、慌しい外部からの刺激や、自分の思いを押し流してしまうほどの情報をひとまず置いてみること。その上で、基本的な用具の使い方や造形活動に集中して向かう態度を身につけながら、造形活動の行為に没頭する中で気づく、日常意識していない自己の発見や自分の中に浮上してくる平穏な心の実感を得ることが大切である。そうすることで得られるのびのびとした解放感、自分の中に、外部からの刺

激とは違った世界が存在することへの気づきに繋がり、それを見つめることで、自分という存在についてのひとつの発見がある。

注

- (1) 上野浩道：美術の力 教育のかたち，春秋社，p.12，2007.
- (2) 同上書 ， p. ii，2007.
- (3) 谷川：芸術をめぐる言葉，美術出版社，p.78，2000.
- (4) ニコス・スタンゴス編 宝木範義訳：20世紀美術，PARCO，p.130，1985.
- (5) 同上書 ， p.280，1985.
- (6) 美術手帖編集部+谷川渥：20世紀の美術と思想，美術出版社，p.166，2002.
- (7) 茂木健一郎：脳と創造性，PHP 研究所，p.143，2005.

参考文献

文部科学省・厚生労働省：平成20年告示 幼稚園教育要領・保育所保育方針(原本)，チャイルド本社，2008.